

令和 6 年 6 月 14 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2021～2023

課題番号：21K00145

研究課題名（和文）光画像計測法の応用による園城寺所蔵国宝紙本墨画五部心観の調査研究

研究課題名（英文）Research and study of the Gobu-Shinkan -collection of Onjo-ji- by optical method

研究代表者

安嶋 紀昭（AJIMA, NORIAKI）

広島大学・人間社会科学研究科（文）・教授

研究者番号：40175865

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：園城寺国宝五部心観について完本の表現・技法を具に観察した結果、前半（第二曼荼羅まで）と後半で4人ずつ2組、計8人の画師に分別できることがわかった。しかも彼らの実力は全員が一定レベル以上にあり、その線質は空海請来真言五祖像に通じる特徴を有することから、完本こそ円珍請来本であり、唐代宮廷画師集団によって制作された可能性が極めて高い。

一方、前欠本の画師は4人に分類できる。うち最も画技に通じる主任格の線質は、応徳三年（1086）「応徳涅槃図」と、大治二年（1127）東寺旧蔵十二天画像との間に置ける。しかも、唯一第四曼荼羅金剛鉤の線質と癖とは特殊で、高山寺の鳥獣戯画甲巻を彷彿とさせることが判明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

園城寺の国宝紙本墨画五部心観には、周知のとおり首尾一貫した完本と、巻頭から約三分の一を欠失した前欠本との二巻がある。しかし、秘仏であるが故にこれまで詳細な調査は不可能で、いずれが大中九年（855）書写の円珍請来本なのか長い間学説が分かれ、当然、写本の制作年代についても確定できずにいた。

本研究はこの秘仏両本について初めて、顕微写真や赤外線写真といった光画像計測法をも応用した実査を施し、客観的かつ実証的に絵画史上に正しく位置付けたばかりか、図像学的考察によって従来不明の善無畏流金剛界曼荼羅の復元に至り、その成果の一部を国内は勿論、パリ大学主催の招待講演において国際的にも知らしめた。

研究成果の概要（英文）：The two scrolls of the national treasure Gobushinkan in the Onjoji collection were examined in detail, especially the nature of the ink lines. As a result, it was found that in the Kanpon, two sets of four painters each shared the first half (up to the second mandala) and the second half. They all possess first-rate technique. The lines they draw are very similar to those of the national treasure Shingon Goso in the Toji collection. Therefore, what Enchin brought back from Tang China was Kanpon.

On the other hand, Zenketsubon was painted by four different painters. One of them can be considered the artist who painted the first half of the Kohon version of the National Treasure Tyojyugiga in the Kozanji collection, because the nature of the ink lines are the same.

研究分野：美術史学

キーワード：園城寺 三井寺 五部心観 善無畏 光画像計測法 台密 絵画 円珍

1. 研究開始当初の背景

園城寺の秘仏として名高い国宝紙本墨画五部心観(以下、五部心観)には、周知の通り、首尾一貫したいわゆる完本(乙本)と、巻頭から約三分の一を失っている前欠本(甲本・残欠本)の二巻が現存する。両本とも巻末に善無畏像を掲げてこれが彼の所伝であることを示すとともに、唐の大中九年(八五五)入唐中の円珍(八一四 - 八九一)が師の青竜寺法全から与えられたとする奥書があり、両本のうちいずれが請来本か議論の分かれるところであった。

2. 研究の目的

しかし、この論争が続くのは、両本が秘仏のため実査が不可能であったことにも因る。そこで私は、顕微鏡観察や赤外線写真等の光画像計測法をも適宜応用して両本を具に観察し、完本が八五五年唐代宮廷絵師による制作、前欠本は十二世紀第一四半期における園城寺内での写本という結論を得た。すると次に、五部心観は本来何を表しているのかという問題を解決せねばなるまい。

3. 研究の方法

必要に応じて光画像計測法を応用し、詳細かつ正確な画面観察を、実物に即して行った。

4. 研究成果

さて、五部心観は原則として縦に上中下の三段を設け、上段に仏の真容すなわち尊像画、巾狭い中段に悉曇文字による密言、下段に標熾や手印等を描いている。しかし、『六種曼荼羅略積(以下、略積)』の記述を良く読むと、最初に善無畏が五部心観を作った時は、横巾が三十cm余り、縦巾がその半分の十五cm程度の横長の絹地に描いていた。現存する完本の縦巾は実測で二十九・五cmであるから、その情報量を全て詰め込んでいたとは到底考えられない。しかし、完本の各尊像を包む月輪の直径ならば十二・五cmであり、上下の余白を考慮すればこの絹地にちょうど収まる計算になる。つまり、善無畏の五部心観は当初、金剛界大曼荼羅から一印会までの尊像だけを、横巾から推して絹本一枚につき二尊ずつ描き出し、貝葉のように用いていたものと思われる。

では、現在見る五部心観のように、尊像以外の要素をも備え、いわば純粋な曼荼羅ではなく、身口意の三密を網羅した手引きのような体裁に仕立てたのはいつのことであろうか。完本の第二曼荼羅では、尊像が内四供養菩薩であるにも拘わらず、密言には四仏母のそれが当てられている。こうした単純な誤謬はインド僧善無畏入寂(七三五)以前には想定できず、その時点から『略積』原本撰述までの間に、彼の流れを汲む阿闍梨によって調べられた可能性が高い。

ここで、五部心観の尊像を順に見ていきたい。『略積』によればその尊像構成は、(1)金剛界大曼荼羅第一が三十七尊、(2)金剛界秘密陀羅尼曼荼羅第二が三十四尊、(3)金剛界微細曼荼羅第三が三十三尊、(4)金剛界羯磨供養曼荼羅第四が三十三尊、(5)金剛界四印曼荼羅第五が五尊、(6)金剛界一印曼荼羅第六が一尊となる。

第一の金剛界大曼荼羅三十七尊の構成自体は、九会曼荼羅諸本に異ならない。しかし、ここで最も気になるのは、五部心観では五仏こそ正面向きながら、他の尊像が押し並べて向かって右向き、つまり菩薩たち自身にとっては左を向いていることである。そこで、この第一曼荼羅が手前上方から俯瞰して礼拝するための曼荼羅と考えてみたい。つまり五仏を中心にして、四仏や各四親近菩薩が右廻りに円を描くとすれば、そして八供養菩薩と四摂菩薩もこれらに準じるとすれ

ば、菩薩たちの方向性がいくつもの円環運動として一つの画面内に収まる。空海以来、日本で我々が目にする曼荼羅はほとんどが正面から礼拝する掛曼荼羅であり、方形に区画されているが、五部心観の場合は掛軸ではなく、敷曼荼羅や砂曼荼羅のように、俯瞰する円曼荼羅の体裁を採っているのである。

第二の秘密陀羅尼曼荼羅の最初に登場するのは、条帛ではなく大衣を纏う毘盧遮那である。不空訳『金剛頂一切如来真實撰大乘現証大教王經』に代表される『真實撰經（初会金剛頂經）』におけるいわゆる五相成身観では、一切義成就菩薩が一切如来の警覚を契機として金剛界如来となるが、第一曼荼羅を経た今、その完成した仏身をここに現したものである。さらに注目されるのは、これに続く三十三尊が絵画的には全て女性尊と見做されることである。条帛があるので一瞥の限りでは男性尊のようにも見紛うが、脇の下や肘の裏に幾本もの衣文が入っていて、原則として密着した衣を着けて上半身を隠していることが判ぜられる。

すなわち、五部心観で大衣の金剛界如来の後に続くのは、女性尊としての五仏、つまり五仏妃である。すると金剛界如来だけを単純に中尊とすることは構造上不可能となるが、ここで想起されるのは、五部心観では男女一組の尊像を厭わないことで、中尊が金剛界如来夫妻と考えることも不自然ではない。そうすれば五仏妃や十六大菩薩妃も所定の位置を占めることが可能であり、四仏母の不在にも納得がいく。第二曼荼羅は、金剛界如来以外を全て女性尊とする「仏妃曼荼羅」と言うことができる。

第三の微細曼荼羅は、やはり四仏母を除く三十三尊構成を取る。全尊ともに正面を向くが、四仏すらも菩薩形で表されており、『三十卷本教王經』巻第七の微細金剛曼荼羅で「壇中遍畫大薩埵」とする偈を想起させる。加えるに、他の曼荼羅では最後に掲載されるはずの四摂菩薩が、八供養菩薩に先んじて十六大菩薩の次に描かれていることも特徴的である。

五部心観が実際に曼荼羅を形成し得ることはこれまでに見た通りであるから、四摂菩薩の登場は必ずやこの順番でなければならない理由があるはずで、その解明には、十六大菩薩の後に第一曼荼羅では四仏母が、第二曼荼羅でも密言だけは四仏母が登場することにあると思われる。すなわち第三曼荼羅では、中央の毘盧遮那を囲む四仏母の位置に、四摂菩薩が配される構図を想定できる。

第二曼荼羅で、すでに金剛界如来の円満なる仏身を現生した毘盧遮那が、ここでは一切義成就菩薩から金剛界菩薩に至るまでの条帛の姿に立ち戻り、曼荼羅の四門にあって鉤召・引入・縛住・歡喜を役目とする四摂菩薩に囲まれることになる。ということは、この場合の四摂菩薩は、曼荼羅全体ではなく直接中尊のもとへの鉤召等を担っているのであり、従ってその対象は礼拝者ではなく、曼荼羅中の諸尊ということにならざるを得ない。であればこそ、四仏が菩薩形であることに意味が生じる訳で、今や彼らもまた中尊の五相成身に倣って成仏の階梯を上ることになるのである。すると彼ら菩薩形の五仏は、第一曼荼羅とは別個の存在でなければならず、一切如来の加持をもってこれから成仏する菩薩「仏子」であり、彼らを生み出した元こそ「仏妃曼荼羅」としての第二曼荼羅と考えられる。諸尊が一様に正面向きであることも、これを曼荼羅に展開すれば納得できよう。無限に増え続ける仏たちは、今まさに花開く蓮華のように法界に遍満し、さらに一切如来と等質となる意である。

第四の羯磨供養曼荼羅について、『略釋』においては「薄伽梵毗盧遮那如来」に始まって四仏が続くことになっているが、最初の尊像は、左手は膝上で衣の端を握り、右手は胸前に挙げて大

指と頭指を捻じており、その姿は第一曼荼羅にあっては北方不空成就如来を想起させる。そこで経軌に当たれば、不空訳『大楽金剛薩埵修行成就儀軌』では「左拳如前當心。右大指頭指相捻。拔濟勢揚掌近乳」とあって、第四曼荼羅のような図像もあり得ることを示している。すなわち、第四曼荼羅の主役は毘盧遮那仏ではなく、羯磨部の如来である不空成就仏の可能性が高い。

これに続く十一体はいずれも上半身に布を纏うが、条帛のように斜めに掛けるのではなく、胸前を覆って両肩から両端を背中へと流し、胸乳を隠していることから、画像としては明らかに女性尊と見做し得る。詰まるところ第四曼荼羅は、第二曼荼羅と同じく先頭の如来以外、全てが女性尊で構成された不空成就曼荼羅ということになり、四仏母の不在も道理に合う。

これを補強する要素として、ここでも尊像の向きが挙げられよう。第四曼荼羅においては中尊を含めて十八尊目から、それまでの向かって右向きの姿勢から突如として左向きに変化する。すなわち羯磨部の不空成就仏妃を囲む四親近菩薩妃、そして中尊不空成就仏自体を囲む内四供養菩薩である。右回りの円環、つまり奥へと入り込んでいくべく旋回する他の菩薩に対し、この八尊が手前へと迫り出して来る左回りの円環を形成しているのは偶然とは思われない。不空成就仏の成所作智、すなわち化他の所作事業を成弁する智恵が礼拝者に向かって進んでくる有様と捉えることができるからである。

残る外四供養菩薩と四摂菩薩の関係にも注目すれば、この八尊のうち、中央から上半分の五尊は右回りであるのに、四摂のうち鉤召を誓願として曼荼羅の入り口を司る金剛鉤が正面、すなわちこの場合は中尊ではなく礼拝者と相対し、その左右上方に位置する金剛香と金剛塗もまた礼拝者を迎えるように向いていることがわかる。あくまで仏の世界の中の物語であった第三曼荼羅までに対し、第四曼荼羅は初めて外の世界に門戸を開いたのであって、しかも衆生への働きかけは主に女性尊が担う、というのがこの曼荼羅の特性と言えよう。

第五の四印曼荼羅の中尊は、『略釈』によれば「阿弥陀如来」である。第一曼荼羅から見れば毘盧遮那の仏部、「仏妃」の宝部、「仏子」の金剛部、不空成就の羯磨部と続いて、ここで阿弥陀の蓮華部が取り扱われるのは、「五部」心観としても矛盾がない。この阿弥陀仏を中心に四方に配する金剛薩埵、金剛宝、金剛法、羯磨はいずれも条帛を着ける男性尊で、左手を膝上に置いて拳印を結んでおり、妙観察智すなわち説法断疑の徳を備える阿弥陀仏と共に、身口意三密の金剛をもって衆生の迷妄を断破する勢いを可視化している。

こうした五部は、それぞれが円環運動を持つばかりではなく、五つが一つの大月輪に収められることで、さらに大きな円環を形成するものと思われる。何故ならば、五部心観では中央の仏部の次に、金剛部ではなく南側の宝部が取り扱われているからである。そして東側の金剛部、北側の羯磨部、西側の蓮華部と、これもまた全体で手前に繰り出す左回りの旋回を呈する訳である。

すると問題となるのは、最後に残った第六の一印曼荼羅の位置付けである。『三十卷本教王経』巻第九には「應於淨妙月輪中。安布金剛薩埵相」あって、五部心観に金剛薩埵が描かれることに矛盾はない。しかし留意すべきは、金剛薩埵が向かって左を向いているということであろう。仮にこの尊像が、九会曼荼羅のように曼荼羅全体を一尊に集約したものであるならば、先に見た大月輪と並列した正面像でなければ収まりがつかず、従って、善無畏流の金剛界曼荼羅は五部俱会をもって完結し、元来第六曼荼羅は無かったものと考えざるを得ない。

金剛薩埵が向く方向には、善無畏の肖像が描かれている。悉曇文字があるために気付かれにくいですが、肖像そのものの上下の余白を見るに、紙の縦巾に対して善無畏が大分上の方に片寄ってい

ることがわかる。一方、金剛薩埵の月輪は、密言の区画であるはずの中段に食み出すほど下げて描かれている。線引きを無視してまで、これを下げた理由は何か。そのような尊像は他に一尊たりとも無い以上、この位置は故意に行われたとしか考えられない。つまり、一切如来の大菩提心を体現する金剛薩埵が有情の娑婆世界に降下し、五部の諸仏諸菩薩の働きを人間である善無畏に伝授した。両者の視線を絡ませたのは、そうした金剛界伝法の系譜を表現したと考えられるのである。五部心観の図相は、金剛薩埵から善無畏へと金剛頂経の直接の相承を主張しており、奥書に拠ればその法が法全を介して円珍へと受け継がれたことになる。円珍は帰国後の貞観五年（八六三）『円珍請伝法公驗奏状案』において、智恵輪については「不空三蔵第三代伝法弟子」と呼んでいるにも拘わらず、法全については「善無畏阿闍梨第五代伝法弟子」としている。五部心観の秘匿性は、あるいはこの辺りに求められるかも知れない。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 安嶋 紀昭	4. 巻 162
2. 論文標題 善無畏流金剛界曼荼羅復元に関する一試論	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 印度学仏教学研究	6. 最初と最後の頁 692-699
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 安嶋 紀昭
2. 発表標題 園城寺（三井寺）の秘仏
3. 学会等名 パリ大学・東アジア文化研究センター・高等研究実習院共催講演会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	高間 由香里 (TAKAMA YUKARI)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------